

シベリア抑留の真実

鳥取県 河上 武實

平成十七（二〇〇五）年は終戦から六十年になります。

八月十五日の終戦を迎えシベリア抑留生活が始まるうとはだれしも想像もしなかった。

思いだすのも嫌いで今まで家族にも余り話したこともなく、孫達が聞くので断片的に話したことはあっても真実を話したことはない。

私がああ酷寒のシベリアでどんな気持ちで二年間抑留されたか想像もできないでしょう。今でもあまり話したくありません。しかし六十万人ともいわれるソ連抑留者がどんな体験をなめてきたか、後世に残しておくことも必要なことだと思えます。

抑留体験の一端でも話してみます。

その前に抑留までの経過を簡単に話しておきます。私は終戦の年の四月一日に松江にある第九航

空教育隊に現役として入営、兵舎が満員なのか近いうち外地に転出するのか、近くの小学校が仮兵舎でした。

予想通り十日間で博多より乗船、釜山に四月十一日に着き一路ハルビン郊外の平房駅に着いたのが四月十六日、駅の前にある第八三七二部隊の第十二野戦航空修理廠に転属。

毎日、戦闘機爆撃機の整備でかなり忙しかった。中には特攻隊機も来ていました。八月初め部隊の一部が転出することになり、その先遣隊として五十人、本隊を後にして南下中の列車に通信筒が投下され終戦を知った。皆あ然として言葉もなかった。

その後奉天（瀋陽）集結、完全武装解除。残念ながらこの時からソ連軍の支配下となる。

二カ月余り費やし十月半ばに黒河を経て、対岸のブラゴエシチェンスクに着き、そこから余り遠くないムーリンの駅に着いたのがちょうど十一月三日、当時の明治節であった。

ソ連は自国の再建のため日本兵をシベリアに送りノルマ制で作業に従事させ、食事事も事欠くこともあり、生き地獄ともいえる抑留が始まる。

収容所は駅より一キロ位で古い倉庫風の建物で、広い敷地には有刺鉄線が張られ、四隅に監視塔があり、カンボーイが常に見張っていた。

古いラーゲリは電気も水もトイレもなかったがストーブはあったので寒さはしのげた。早速別棟の小屋にトイレも作った。灯りは白樺の皮を燃やし、水は民間人が馬車で運んでくれた。食事は小豆や大豆そしてコーリヤン等の水炊^{さん}で塩味もなく、量も少なく最低だった。

五日経ってから作業開始、我々の班は白樺の伐採で朝八時半から五時半頃まで、民間人の案内でカンボーイ二人位同行した。

白樺は切り倒し枝を払い、長さ二メートルに切断し、幅一メートル、高さ一メートルに積み上げるのが一人一日のノルマだった。払った枝は燃やして時々暖をとるが、長くいるとノルマが達成で

きないし、辛抱していると凍傷になる。あまり長く暖をとっていると兵士が来て、ダワイダワイと言って怒鳴る。なかには火を蹴飛ばして火を消してしまうことも度々あった。毎日これの繰り返しだった。五カ月位風呂にも入っていない。顔も洗っていないので真っ黒、目だけがギョロギョロ光っていた。

二十一年一月中旬より栄養失調で体力は低下、加えてシラミの大発生だ。痒いと思って手を入れると暗がりでも一匹二匹は手にした。下着をストープの上で振るとパチパチと音をたてて落ちた。水に漬けて一晩外に出しておけば親は凍死するが卵は死なず、またムズムズと痒くなる。

栄養失調に加えシラミの吸血、この頃から死者が出始めた。私も隣の戦友を二人亡くして、その埋葬に携わったが、又それが大変で、穴を掘るにも土が凍っていて掘れないので、火を燃やして少し掘り、繰り返し一日約五十センチ位が精いっぱい、これに埋葬し上から土を盛っておく程度で

した。春になって深く掘り直した。

早速我々で風呂場と煮沸消毒の設備を完成したのでシラミからもある程度解放された。

栄養失調による体力低下は恐ろしいもので、六十センチ位の溝も飛べず大廻りして通った。

ちよつと尾ろくな話だが、夜間小便がしたくて外に出るがトイレまでもたない、途中で放尿。朝起きてみると氷の列で、皆が同じことをやっているのです。それだけ寒さがきびしいのです。

三月頃になり、寒さも少し緩和され、収容所の新築にかかり、かなり住みよい建家になり、灯りは白樺から灯油に改善して快適になったが電灯は帰るまで縁がなかった。

電柱はあったが独ソ戦で金属類は撤去回収されたようです。

四月頃になり各班の作業内容が変わり、我々の班三十人位は建築部門になり、ログハウスで六帖四間位の平家を建てた。完成すれば符号を記し解体、どこへ行くのか貨車に積み込まれた。

帰るまでこの建築作業であった。

シベリアでも春になり暖かくなると花も咲き、木の実も見えるようになる。ある実を「復員」と名付けて食べたこともある。

ラーゲリのあるこの辺では、黒パン、馬鈴薯が主食のようで、子供達が日本に馬鈴薯があるかとよく尋ねた。

二度目の冬は我々で環境をよくしたので最初の冬のようなことはなく、死者も出ない。食事も黒パンがでるようになったが量は少ない。

一つ嫌いな作業があった。夜間作業で、不意に叩き起こされて引込線に入った貨車に材木の積込作業で三時間位、時には朝までかかることもあった。

零下三〇度位、それを越えているかも知れませんが、誰の手か足か解らぬ程で口は強張って言葉も出ない。鼻はローソクのように白くなり、お互い背中にこすり合って凍傷を防いだものだ。

小生も足の凍傷で今でもまともな爪はない。

ある戦友はズボンのボタンを外すことができず、そのまま漏らして靴に溜り、ひどい凍傷で足首から切断の手術もした程でとても口では言い表すことができない。

この作業が一週間に一度位あった。

三月初旬頃ダモイの話があり、荷物を持って広場に集合させた。荷物検査を行い、目ぼしい物・書類等没収された。腕時計三個位腕にした兵士もいた。三月の下旬頃、又ダモイの話があり、もう何もないぞ、あるのは外套、飯盒、水筒、毛布位だ。

しかし今度は本場で、実現した。

ナホトカより乗船し、これでシベリアに後戻りすることはないと安堵した。

船内で白米と煙草のうまさをしみじみ味わった。シベリアではひまわりの葉茎を乾燥し、刻んで新聞紙に巻いて吸っていた。

いよいよ内地が見え、祖国の温かさを胸いっぱい感じた。

昭和二十二年四月十六日舞鶴に入港、有難い一歩を踏みしめた。

今生き抜いて帰国できたことを喜んでゐる。

そしてシベリアで亡くなった戦友のご冥福を祈ると共に永遠の平和を願い、筆をとめます。